

学校経営のポイント

豊かな“教育的自然体験”と“生きる力の育成”

若井 彌一

平成 23 年 10 月 10 日、筆者は新潟県妙高市にある「国立妙高青少年自然の家」の開所 20 周年記念式典に臨んだ。

幸いにも、この時期にしては穏やかな「小春日和」（和製英語の感覚で表現すれば、koharubiyori であるが、英訳では一般に Indian summer か mild autumn weather）の好天に恵まれての約 1 時間余りの式典となった。式典と併せて、「大感謝祭」も行われており、多くの親子連れ参加者でのにぎわいに包まれての式典であることも印象的であった。

というわけで、今回は上記のような見出しでの課題提言となったしだいである。

自然体験拠点施設としての実績と可能性

国立妙高青少年自然の家は、国立の青少年自然の家としての設置順でいえば、14 番目の施設として平成 3 年 4 月に設置された。その後、同類の国立施設は設置されていない。

国立の単独運営施設として設置されたものであるが、その後の「行政改革」の流れのなかで、独立行政法人による運営形態（いわゆる「法人化」）となり、さらに現在は、独立法人の改編により「独立行政法人国立青少年教育振興機構」の統括のもとでの青少年教育施設として運営されている。

こんなことは、利用者の側からすればさしたる関心事ではないと思われるのだが、設置後のいわば「風雪の旅」の側面を学校教育関係者にも、ぜひとも知っておいてほしいと考え、紹介したしだいである。

注目しておくべきは、この施設（妙高青少年自然の家）の 20 年間の利用者が約 217 万人に達しているということである。利用者の多さだけで、この施設・設置の意味があったというのは安易に過ぎるか

もしれないが、有力な参考にはなりうる。

延べ人数とはいえ、この人数（本年度の分も含めると約 221 万人とのことである）は、大都会の交通至便の娯楽施設ではなく、大自然の真ん中にある青少年教育施設であることを考慮すると、驚異的な数字であると思われるが、どうであろうか。

リピーター（複数回利用者）の数が、この総数のなかのどれくらいになるのかは知らないが、リピーターの数は、数的側面から施設の利用価値を評価するうえでは、有力な指標となる。娯楽施設ではないものの、利用者はこの公共的教育施設（人的・物的・運営的要素の総合的概念）が気に入れば複数回利用する可能性が高いことは、常識的に予想がつく。

教育的な自然体験プログラムとその実践

式典の祝辞のなかで、筆者がとくに印象的であったのは、地元・妙高市の濁川明男・教育長のスピーチ内容であった。

児童・生徒がこの施設を利・活用して、どのように人間としての力（とくに、人間関係力と表現されていた）が育成されていくのかを、それが単にあるがままの自然体験をさせることによってではなく、教育的に目配り（気配り）された計画性のある自然体験プログラムに基づく、すぐれた指導者による実践によって実現されていくことを、豊富な体験を踏まえて話された。

スケールの大きい、まさしく「生きる力」にとって、この施設がいかに大きな役割を果たしているかを、あらためて実感した。「百聞は一見に如かず」である。ぜひ、一度は訪れていただきたい。

（わかい・やいち = 上越教育大学長）

本紙は <http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp> でも掲載

●最新刊 好評発売中！ 118 のテーマごと見開き頁でポイント整理 判断に迷ったときの手引に！

『コンパクト 教育法規ハンドブック』

菱村 幸彦（国立教育政策研究所名誉所員）【編】

A5判 270 頁 / 定価 2520 円

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料 FAX 0120-462-488 をご利用ください（24 時間受付・即日発送）